ディバチャンドラの般若知論

壁　瀬　灌　雄

Devacandra の Prajñajñana prakasa は金剛乘大印派の所依の小論の一つ著者は十世紀末の maitripa の弟子とデブゴンは云ふ此書の概要を把握することに依て般若 prajña と知 jñana とを明にせんと思ふ。

先ず般若を何故に示すかについて「蘊處界のそれらは存することなし、と觀察することによりて空である「般若知」とはそれ自身是の如きものである。それだから般若知を說く（序偈終）これ世尊の卓越せる無所得の大悲で一切種の最勝を具する無上眞如と名ずくる別名を有し無自性であり又本願力で成された任運無功用に專念（双入）し一切衆生を一つに利益する身を受持して大樂の享受たる深甚廣大な敎」である。

「然らば何故に此れを說くか（蓋し）貪著等が長く輪廻の惡趣に流轉する因であるにより、これは又諸有情が長時に執著して恐怖を生じ迷いを致すから愍んで往昔になした罪惡の業を作ることにより地獄餓鬼畜生等の大苦を經驗して執著等と結合する是の如き持毒者等に乳を灌ぐ如く歡喜を增すことを見ざるやと云ふに、それは眞実で、善知識と離れたそれら執著者は貪欲と相應して專ら苦惱を致すから、そのものの爲に聲聞乘緣覺乘等の多くの敎がある。次に又よく貪欲を離れた者達が貪著に於て瞋恚して反感を懷くからそれを實に苦惱する、それらの爲に貪欲を說いたのである、それは又

「貪欲と離貪とに再び又疑念を起すであらう。
彼等に貪欲を棄てさせん爲に貪欲と離貪とに觸れしめず」

と說く、或は

「貪欲を離れるが如き威嚇は三界に他になし。
その故に汝は決して貪欲を離れようとなすな」と世尊は說かれた。

貪欲を離れえざる所の者等に大貪欲を示して是の如く又

「何かに貪著するその境を貪ぼる事を離れてそれを棄てる。そして無垢慧の瑜伽によって取らず、棄てることもなすな」

と說いている。

次に般若知は何にかを云ひ(a)般若と知との合成語であるこ

とを示す「吉祥サラハ師によると又

『或者は諸境を執著し、或者は境に繫縛せられるが、何づれの境に於ても最勝者は覺を得る』

と說けり

されば貪欲の諸有情には貪欲を離れることに導き。貪欲を離れた者には貪欲の中道によりて、貪欲の中道に依る者には大貪欲で導く、そこで諸有情を最勝たらしめるためには、此の無上甚深の般若知を說く。そこで世尊によつて

「唯一片の毒によつて總ての人を死に致らしめんに、その毒を毒であると知るならば、毒によつて毒を除くことができる」

と說く。他にも又

「貪欲は菩提の支分なり瞋恚も菩提の支分なり」

と云ふ等とある。知成就によると

「例へば精 Rasa の洞 guhā の銅が、美しい金になる如く、知の精の洞で煩惱は善となる」

と說く、だから五蘊たる色受想行識と云ふ存在は淸淨なる大日・寶生・阿彌陀・不空成就・阿閦であり、十二處とは六根と六境。十八界は眼界、眼識界、並に耳識界等と知られる。四大有とは地水火風界で、自相を執るが故に界である。有と無との分別は空なるが故に四邊（有・無・亦有亦無・非有・非無）を離れて、不生不滅、無自性を知るを般若と云ふ。それは又

「象より生ずるものは不生である、そこに生の自性は存するにあらず、象によるが故に空性である。空性を知るものは不放逸 apramāda である」

と云ふ。入眞實論 Tattvāvatāra の中にも

「凡そ戲論の境は存在せず、故に語の境にもならない。執金剛が知らしめして、それが卽ち明 vidya の自性に於る般若 prajña と云ふものである事をよく宣布された」

とある。故に緣起の種々の心は、唯大樂の自知のみであつて「無緣の大悲」と云われる別名のある知 jñana である。般若 prajña も又そうであり知 jñana も亦そうであるから prajña-jñana と語が合成されたのである。」(b)般若知は業支分母として瑜伽の形を示す「一切相の最勝を具する空 śūnya と世尊母般若波羅蜜とにて業支分母 Karmāṅgī たる一切の色身に住するのである。……

「世俗の身體を取り乍ら般若の彼岸に到達される。

知成就によると又

「二根より生ずる樂は、眞實でると若者は云ふが、それを又大樂であるとは最勝佛は說かれず」

と云ふ等で業印は俱生の自性にあらず、棄てられるのだからと云ふならばそれも眞實で、その業印は虛僞だからである。業は所作であつて身口意の有相なるものである。それによつて標織された印は儀軌の自體に於て業印と說かれる。法

印は眞諦で虚偽でないから（龍樹の四印決定に Om 法印は法界の自性にて戯論を離れ無分別自然である。生起を離れて悲の自性、最勝歡喜で一體の妙方便となる。相續不斷、俱生の自性で般若を伴うものより生ずる無分別なるものは法印と知るべし）相と異ならざるを以て（眞諦と）別なものにあらず。大印は無自性を證する有相なものでそれは自然（法爾）なものである。その虚偽に成るは虚偽の般若に依る業・法・大印の眞實相は河の流れの不斷なる如き、大樂の自性、一切相の無上眞如の眞實性、不壞なもの一切知々、生起するものにあらざるものだけである。故に龍樹によると等流果と說く。

俱生の顯現には又俱生の影が隨逐するから。それは又我が聖師によると

「大印を知らずに業印だけを成就すると、そのため筋肉の衰弱を來たし瑜伽行者がそれによつて苦痛を叫ぶに至る」

それはどうしてか「大欲と云ふは大印、無邊なる樂の自性、一切法の自體が大欲で、空悲の二つの双入の自性であつて、貪欲で貪欲を明かに究竟した所に樂にして欲なるもので、これは業印を理解せず經驗せず經驗せずしては現在前する能わず」……先ず初めに業印を示すのは矛盾でない、尊師の教示によると

「業印をよく成就して、法印を觀想す。その上に大印があつて。何れからも、三昧が起る」

と說く……唯歡喜のみの等流果と（是の如きを或師は說く）異熟果と離繫果とそれから次第に士用果を成ずる。尊師は又

「業印には種々相あり。異熟より生ずるは法印、離相は大印。獲得には三昧印」と說く云々「抱擁接吻等の種々相を說く、結果はそれを遮して樂の知を行ずることである。我れが樂を行ずと云ふは實は大勝喜樂 Pratosa を行ずる事である」

と說かれる。それだから最勝歡喜と離歡喜との中間に住して強引力と錯誤力とを捨て、貪欲と離貪欲とで寂靜なる空性と悲との別れない俱生を彼の尊師の面授によりて會得するのである云々般若支分母の智慧を示す」に外ならぬとする

四　印	業　印	法　印	大　印	三　昧　印
四　刹　那	種　々	異　熟	離　相	獲　得
四　歡　喜	歡　喜	最勝歡喜	離　歡　喜	俱生歡喜
四　果	等　流	異　熟	離　繫	士　用

次に般若知を如何に成就するかにつき七支成就を示す「その時又諸般若波羅密乘の成就の邊は何ずれも無數却で等正覺に到るが眞言の理趣では此の生に於て佛或は金剛サッタになろうと、七支分を具することで成就する。

「受用圓滿に、[1]接吻、[2]大樂、[3]無自性と悲心充滿、[4]相續不斷と無障碍[5]とで、七支を具するそれを我れ成就せんと願ふ[6]」……[7]

それは業印の支分母無しには享樂を知る能わず。それは又恍惚狀態でもない。外面の印は等流果と說かれるも、それ但

の報告ではない。

七支を具して又空性と悲と無別なる智を得て是の如く受用を圓滿し、享樂する緣起法から一切相が現ずるのである。接吻とは空性と悲とが結合するからである。大樂と云ふは有と無等の一切分別を棄てるからである。無自性とは生起するものでないこと悲心充滿とは大悲性となるから。相續不斷とは常に相續するから。無障碍とは無量の故である（ハラミッ乘に對しサハッヤを以下細かに對比しつゝ說くが略す）波羅密乘では無數却の間修行せねば正覺は得られない。眞言乘では此の生に於て獲得せられると云ふ考へは次の樣である。他の何ずれの佛に依るとも唯それだけでは等正覺は得られない。大印の樂の自性たる接吻がないからで文殊等の諸大菩薩の智の味を受用する受用身は得られないからである。空性と悲との結合たる接吻が存しない。唯の生起次第のみか或は是の如き等では自知による空性で樂の有相の智として、二根雙入により生起するが如きを誰も經驗しないから。それ故、それを修習しないものは大樂よりなれる金剛サッタの地位は觀察されず、そこでこの大欲の理趣で金剛サッタを成就せんとするが故に、接吻を示すのである。そのためにこゝに佛果と差異があるから持金剛 Vajradhara と云ふ。然るにハラミッの理趣でも又受用身を成就して聖者慈尊が說く。

その三十二の勝相と、妙隨好より成れるものは、大乘で直ちに受用する所であるから牟尼の受用身を稀求す。と說く

此の存在は如何と云ふに餘は受用身を碍えるつもりもなく又等正覺が無いと云ふでもない。

凡そ此界の衆生は皆成佛する。それは機根を具せざるものは誰もないから

と說くが故である。次に三輪不可得の施ハラミッ等を修し、初地を得て三無數却で十地を成就し、無自性を現前して、福智の資糧を積集するに、唯遊戲の如くに佛事を行じて正等覺を得るが故に、短時にして能く成ずる。時に一切の如來、來りて攝持するを見て彼等は業（カルマ）の理趣で親近するを得て彈指須臾の間に等正覺を現成するさて眞言乘ではたとい五無間業をなしたものでも佛種性等の緣を具して勝れた善知識に親近し、業印の方便で如實に義利を成就し、如實に敎示を受持し、不善の罪惡を棄てたものは善行と方便とにより、勝慧を以て唯彈指の間に布施等の無上功德の資糧を圓滿して此の生で佛果、持金剛の果を得ることは勝れたものである。是の如きは『呼金剛經』によると

五無間業をなすと、殺生を喜ぶと、次に又賤しい生れと怒り迷へる者として、醜惡の手足を持ち乍ら、それでも觀想するならば佛國土に生ずるであらう。

と說く。又それによると

此の大乘は因と果との地に至る乘と眞言乘との二つを示

す。と說き兩乘共、眞實と云ふ考へである。施で初地歡喜に住すと云ふ等の故に六波羅密を修し、それ〴〵を成し得て後、不退轉になり速に無上正覺を成就することである。初地は最勝成就と說いて、波羅密乘を示すが故に、その大乘波羅密の修行で何故成就し得ないかと云ふに、いやそれはそうでない。氣にかけ乍らも、そんなに長くなると、續かないで又輪廻する。これ業印等の大樂成就法を離れるが故と彼等は地を得ても又小乘に落ちるからである。

そこで又世尊は

佛子が地を得ても慧が堅固でないから乃至八地に到るまでは、かれらは小乘に墮する怖れがある。此の秘密の大輪に入るものは、佛の自性たる、その大乘に乘じて無畏を成ずる」と說く。又

六つの難行苦行に依りて成就されず。五欲を受用することに依りて速かに成就する

と說く。それは

波羅密の理趣では長く苦んだ結果成熟するが眞言の理趣では何の苦難も無くて、速かに正覺する

と示すからである。一切法自性淸淨なりと考えるそれは自覺知證せねばないのに（今はその）自知は又大樂なりと云ふ。

次に眞如のみに依つて大乘の義を云うものはこれ無知にして眞言の眞實性の了解を證せずして、それを現前することは出來ないからである。それに又一切法は空性と云わない者もある。よつて〈この一切法の自體をよく觀察することは困難なり〉と說く。誰でも樂と苦との分別を離れると云うが、それは眞實だが餘等は最勝（歡喜）と離歡喜との中間に自知を成就するのであつて苦道を安樂だと證ることではない。

世尊は又

欲にあらず離欲に非ず、中道も亦不可得なり

その三者を棄つるもの、これ俱生の菩提と云ふ

と說く又

自知を未だ證せざる智で、修するのは佛の淸淨智でないからそれは智者によりて棄てれる

とも說く、具吉祥サラハ師は又

分別を靜めれば又その慧も寂靜になる。と或劣慧者は云ひはやすけれども、その妙慧を執じて何に成ろうぞ　空を措いては何事も出きない。一切の分別を改めかえた智慧。それこそ最勝樂を顯明にする。これこそ爲すべきを爲した智慧者と云ふもので、それの出來ないような者は二足獸（二足は人間のやうで心は動物だ）である。

他に又貪著で調伏するものゝ爲に此れを示すけれども眞實でないとてそれは佛の語ではない。貪欲者を調伏の爲に大欲を示すは背理である。それらの貪欲を寂滅せんがために苦しからずと示すのではないかと云ふに

貪欲と離欲との爲に主尊は平等に建てられた。これ離欲と欲との中間に於て大欲が破壞するのである云々

要するに〈その乘は唯一のみ、此れ大乘である教も亦唯一つのみ、此れ大欲である〉と說く」と卽ち眞言乘サハジャである。

最後に大眞言乘を分類して云ふ〈そこで大眞言乘を表示すれば二つで、生起次第と究竟次第である。生起次第には二種に分れて、外の生起次第と甚深生起次第である。究竟次第は三つに分れて究竟と成就と自性との次第である。外の生起次第は〈六灌頂で如來に安住すること。甚深生起次第は業印母の智で執金剛に安住すること。究竟次第は法印で樂の自性を得る所、此れは此れだと云ふ現在の智である。卽ち刹那に無所得の大悲が現前する故に、能執所執の觀念の泯亡した最勝樂を云ふ。青等の相ある一切諸法の印は律儀 saṁvara で同一味であり、無自性で而も有自性だから法印と云ふ。三昧印は成就次第であつて、有情の利益をなす故に、般若と方便とより成れる三十二相等の一切の功德を具する呼金剛 hevajra と妙金剛等の相ある受用身・變化身とM輪の自性明なものは三昧印、云々

亦自性次第は普賢等となつたもので不思議の殊勝なる福智によりて、上師の敎示で任運に一刹那に現等覺する一切知性であつて、此れが大印と說かれる云々此大印は諸印を攝めて大印だけで廣く一切印を總括する。

以上拔萃した如く此の論は俱生乘の般若論であり、般若の世俗へ等流する知である。それを自知として表している。自知は直觀である。單に自知のみでは盲目であり、亦單に般若のみでは世俗からは空虛である。般若自知に於て世俗の一切の有は我、我所執の煩惱ではなく般若を世俗に實現するそれが方便となる。世俗の一切有をして方便に改造する働きが般若知の働きである。人の生命をうばう毒ではなく毒を除く毒である。

山口先生の「動佛と靜佛」の十一般若の慧から大悲への轉回に「先に言ふ如く般若波羅密なる智慧は無二智であり、能所寂滅の空であるがそういふ空なる慧を捉へ空に停滯していることは空なる智慧の本義に違背することである。これに對して空なる智慧の本義を完うじることは、空が空に停滯せずして吾々が限りなく我・我所執に捉へられる姿を見出して、それを批判し、その執著の煩惱が打破せられることである。卽ち限りなく般若波羅密化の行ぜられることである。然るに我執我所執の煩惱が打破せられ、眞如化せられること以外に慈愍せられるといふことはあり得ない云々いま述べたやうな悲のはたらくところは淸淨化の行はれる所である。それは大悲は我執、我所執の有の世間に出て、その世間の所執を打破するからである。そこで先に般若の智慧が無二智と云ふ出世間のものであつたのに對し、いまそういう大悲を淸淨世間智と云ふ。世間を對象とする限り、その智には能所主客がは

たらいている態である。

はたらきながら能所の實體としての執著を打破する。それが清淨の行なわれていることである云々般若卽大悲としての展開である。」

此の「世間を淸淨にする智」「般若卽大悲」は「般若知」と同じ次元に示されたものと思ふ。

Prajñopāya viniçcaya siddhi に(2)彼の自性を知らざる無盡の衆生を利益せん爲に、具吉祥アナンガ金剛、吾は眞實を槪說せん(3)嬰童が誤りて、眞にあらざるものを徧計することにより有は、徧計より成れるもので、それが輪廻であると慧者は說けり(6)劣慧の彼等は有に大いに執著するものとして存する限り輪廻の獄に住するに、どうして自他の利益が存し得んや(14)知と所知とに分けて、結合によつて全てを觀察して、諸法の自性無き性は般若の眞實と說かれる。(15)無盡の苦より超出せんとする有情に愛著を以て執著する所のものは悲と名づくと云ふ(16)常に相應する瑜伽行で、人が現に願ふ所の果を與へる所のものを方便と名づくと云ふ(17)水と乳と混合する如く、二無き瑜伽行に於て、二者を攝する所の存在を般若方便と名づくと說く。(18)是の如く何れも加へることも減ずることも不可能にて、加へることも減ずることも棄てるは諸法の眞實性と說く(19)能執と所執とを離れ、有と無とを棄てゝ能相と所相とを解脫する自性は淸淨無垢である(20)二でもなく不二でもない。減したる一切に善住して、各々自知で不動にして方便と般若と亂さざる(21)それこそ一切佛の最勝稀有なる住處で善く本尊を圓滿するを法界と稱す。(22)三世諸佛の所依とする所の無住所涅槃にて悅意の自加持の住所最高善の般若波羅密である。(23)三乘と三身と千萬無數の眞言と印、M輪と世間とそれより越へることと(24)天と阿修羅と人と餓鬼等是の如きその他も、そのものより發生して、又そのものに復旣する。(25)無盡なる諸人を如意寶珠の如く全て安住せしむる般若と方便との自性によりて修行と解脫とを正しく享ける(26)そのものを正しく證して往昔には善逝が正覺し、現には一切が正覺し、未來にも亦正覺するであろう。衆生利益の爲に。(27)無邊の樂を構成するを以て吉祥大樂と名づく、彼の最勝なる普賢と共に現等覺を成じたい。(28)比いない慈悲は三趣のあらゆる苦惱を克服することのみに專念し、種々無量なる所知の聚に愛著することから解脫する最勝慧を等攝して自他の利益と安樂との身がそのものであると牟尼王が說く」（般若方便を說く第一章の拔萃である）

輪廻（S）と涅槃（N）との異質的二元性（S∨∧Z）を等質化する般若方便同一、空悲一味の瑜伽がサハジャの二根の結合である（P＝u）般若が方便と一體に成るには自知による般若知（P.j）こそ俱生乘の般若の形態である $\left(\text{(P.j}\ \frac{S\vee\wedge n}{P=u}\right)$ 此の拔萃を結語とする。